

「音読から黙読へ—近代読者の成立」

本講演会では、読書・読者を中心として、それらを取り巻くさまざまな問題を取り扱っていくわけだが、本を読むという行為自体が希薄化している現状を踏まえ、いろいろな立場があるなかで、「読書・読者」の位置をどのように見定めていくかが、講演会準備用プレゼンテーションの課題といえるだろう。

今回は、前田愛 著『近代読者の成立』を、「音読から黙読へ—近代読者の成立」の章を中心に、読者を歴史的に振り返ってみたい。

〇、 所感と方向

「音読から黙読へ」を読了し、一考して思ったことなのだが、この評論で、音読から黙読への移行に関する原理的な説明は明確にはなされていない(たぶん)。音読から黙読への移行が、事実に明らかであり、それを成立させた周辺事項の整理を行なってみると、どうやらそれは、明治初年に起源を発しているらしく、近代化というものとパラレルになって、近代読者を成立せしめている、という段階の評論である(それだけで充分画期的な力作だが)。前田愛はさまざまな角度から問題に切り込んでいるので、それを土台として、新しい論議を出すことは、今後求められていくところだろう。先づは、音読から黙読への周辺事項を追ってみることから入る。

一、 近世出版機構の解体

近世の出版機構は、木版印刷によって成り立っていた。そのため、必然的に限られた部数しか出版することができなかった。現在のように活字が周りにあふれているという状況とはまったく異なり、本は貸本屋(注1)で借りてきて家族で共有するか、家族のために一冊の本を買うという程度でしかなかった。

しかし、その出版機構を突き崩し、人々に新たな読書体験を為さしめることになったのは、「活版印刷術の普及」と「新聞雑誌ジャーナリズムの登場」に影響を負うところが多かった。これらの登場は、第一に、大量生産による廉価な出版物の提供を可能にした。毎朝(!)届けられる日刊新聞

では、「つづき物」と呼ばれた連載小説が、広範な読者層を得ることに成功した。戯作小説（注2）は貸本屋のストックから解放され、活版印刷によって今までよりも安価に、読者のもとへ届けられるようになった。分冊形式で出されていた長編合巻が、一年に出版されるのが二編から三編であり、その読者が、三日ごとにしか来ない貸本屋から、まめまめしく本を借りている姿を思い浮かべると、その衝撃もうなずける。

二、本の共同的享受から、個人的享受へ

上に書いたとおり、書物は家族全体で共有するものであったが、その享受も家族全体であった。「毎晩、父がおもしろく読んでくれるのを、母は針仕事を、姉は編物をしながら、家内じゅうで聞いた」（注3）という家族団欒の図が明治初年にはあった。本に限らずとも新聞でも、父が声を出して読み、家族はそれに聞き入るといった形式は一般的であったろう。それは近世の出版機構の問題でもあり、当時のリテラシーの低さ（注4）の問題でもあった。中流以下の階層や、婦女子の読書状況を考えると、音読されたものを耳で聞くという読書スタイルはかなりの人数に及ぶと思われる、音読の習慣はリテラシーの問題と根強く関係していただろう。

しかし、個人的に読まれるものというよりも、「家族共同の教養の糧、娯楽の対象として考えられていた」（164頁）書物も次第に個人的な享受体系へと推移していく。それは活版印刷の普及が大きな要因であり、個人的な蔵書を持つことができるという発想自体が、このころから発生していると思われる。

そして、そうした書物の個人的享受が、黙読という読書形式を成立させた一因と考えられる。それまで、世代の読書体験とは、おどろくべき等質性を保っており、洗練され、秩序立てられた教養を押しつけられた、ある種、非個人的な読書であったのが、多元的・個人的な読書へと推移していった。以下、少し長くなるが、よくまとめられた部分があるので、引用する。

明治維新に引きつづく約四半世紀は、日本人の読書生活が大きな変革を迫られた時期であった。その変革の過程をつらぬく契機は、ほぼ次の三つに要約されるのではないかと考える。

- 1 均一的な読書から多元的な読書へ（あるいは非個人的な読書から個人的な読書へ）
- 2 共同体的な読書から個人的な読書へ
- 3 音読による享受から黙読による享受へ

この三つの契機は分かちがたくからみ合っているけれども、その根底には飛躍的に増大する情報量(木版印刷から活版印刷へ!)と、共同体のきずなから解き放たれて自我にめざめて行く近代人とのダイナミックな相互作用がある。それはリースマン流の表現をかりるならば、両親や教師から授けられた規範に従って生きることを善と考えていた伝統指向型の人間にかわって、活字をとおして自己の信念を築き上げ、未知の世界へと孤独な冒険を開始する内的志向型の人間が登場する過程ということになるだろう。(一五八～一五九頁)

この「内的指向型の人間」こそが、黙読形式をなす近代読者像といえる。近代的な読者とは、伝統的な価値観によって生活の指針を与えられるのではなく、印刷されたメディアによって、自己激励の資料や、成功につづく途のガイダンスを各々与えられるのである。ここに前田愛のスタンスがあるように私には思えるのである。

三、 散文の文体改造(言文一致)

黙読形式の誕生を、文体の側(作者・作法)から捉える見方もある。元来、小説の文章は「誦読の際読者に快楽を与ふる」ものでなければならぬという認識が前提にあった。こうした享受方法とは、音読と不可分に結びついた文章感覚であり、文章の形式美のみを切り離して玩味しようとする鑑賞の姿勢が根本にあった。そのため小説の文章は、単純透明な表現を志向する散文ではなく、韻文的装飾を凝らした美文である必要があった。言文一致を目指していた山田美妙(注5)は、その著『二人比丘尼色懺悔』をめぐる批判、「格調の乏しき、韻律の欠如」を指摘されたとき、二点、反駁を試みている。それは、

- 1、 散文を韻文のように読む鑑賞方式への批判
- 2、 韻文のリズムとは異質な次元に立つ散文のリズムの確認

であった。こうして、散文の独自性を説く美妙の場合でも、「読む」と「吟ずる」とは対立する概念でありながら、「読む」とは、黙読を意味していなかった。黙読形式の読書が享受され始めるのは、「話コトバを用いて書く」という意識から、「話すように書く」という意識への転換。二葉亭四迷(注6)の『浮雲』や『あひびき』からとなる。

音読から黙読への移行、その一番の変化は「内面」の誕生ではないかと私は考える。柄谷行人が「内面の発見」(注7)で言うように、「内面」の誕生は言文一致と密接な関係を持っている。柄谷「内面の発見」では、作者の側の内面(書く側)を中心に扱っていたが、それを読者の側で

行なったのが本書であろう。言文一致体小説を黙読で読むことが、読者の側に「内面」をもたらす契機になったのではないだろうか。

二葉亭に戻る。「話すように書く」とはどういうことか。それは、言いかえると言文一致体の「言」が「話コトバ」一般ではなく、作者の主観を潜りぬけ、作者固有の口調を帯びた「話コトバ」に限定されるということである。

作者は韻律や格調の粉飾を洗い流して、彼じしんのいわば「裸の声」でじかに読者にむかって語りかける。それは作者の個我の自覚、内面の衝迫が要求し、選び取った方法でなければならない。このはあい、散文のリズムが読者の「声」の問題としてよりも、先ず作者の「声」の問題として提起されたのは当然であろう。(一九四頁)

こうして、二葉亭は散文のリズムを、作者の「声」の問題として出発した。二葉亭は日本在来の文章のリズムを「どうも変化が乏しく抑揚頓挫が欠けているように思はれ」(注8) と言っている。それを「二葉亭の求めた声調は作者の詩想と密着した内在的リズムでなければならぬ」(注9) かったからだ、前田愛は主張するが、つまりは二葉亭が、「内面」をあらわしうる文体を言文一致に求めていたということではないかと思う。そして二葉亭の意識は読者の側にも及ぶ。

文章によってある程度までは朗読の巧拙に拘わらず文章其物の調子があって、従って黙読をしても其者に調子が移つて、どんなに殺して見ても調子丈けは読む物の心に移る文章がある。(二〇六頁)(注10)

音読によってはじめて顕在化するのではなく、黙読によっても触知しうる散文リズムの形式。それが読者の内面にもたらす共振作用に、二葉亭は言文一致の可能性を見ているだろう。作者の「声」に他人を交えることなく孤独に向かい合う、そうした内密な交歓に参与する資格を許された読者こそ「近代」の小説読者と言えるのだろう。

言文一致体小説がどうして黙読形式の読者を獲得したのか、ということに関して、二葉亭の翻訳小説『あひびき』などが、一人称小説であったことも、原因としてある。初期の言文一致体小説は一人称の形式をとったものが多いが、『あひびき』に関しては視点が「のぞき」という一人称の中でも刺激的な効果を持つ視点であり、本来的に黙読する孤独な読者を要請していると言える。もうひとつは(気乗りしないが)、言文一致体小説が、形式美の玩味よりも、形象の把握に力点を置く、作者ないし作中人物に同化してその思想・感情を追体験する「論理的読法」や、作者と読者の心理的距離が消失する感覚をつくり出した点にあるだろう。

四、まとめ

本書を読んで飽き足りないのは、上でも書いたとおり、音読から黙読への移行を、犯人の知れた推理小説のように解いていくその解き方が、結果的な物のつじつまを、上手く合わせてみただけのような気を起こさせてしまうからだ。原理的な黙読への説明が欲しかったところだが、それは作者の埒外かもしれない。周辺状況を整理すると、先づ、近世の出版機構の解体があり、読書はより個人的な営為となった。それだけではもちろん黙読へは移らない(書物は、一人で読むときですら音読されていたのだから)。黙読へは、新しい文体の創出が必要であった。そして二葉亭に至るころになり、ようやく人々は黙読に自らのものとし始めた、というところであろう。

五、おまけに 『声に出して読みたい日本語』と『近代読者の成立』

昨今は、まれに見る「日本語」ブームである。もはや本屋では、「ハリーポッター」と「日本語」と「英語」の本しか売れない状況である(トーハン調べ)。さて齋藤孝の『声に出して読みたい日本語』であるが、テキストとして掲載されているものは、歌舞伎・大道芸・新国劇・浪曲・詩吟・狂言・経文・唱歌・落語・民謡・漢詩・文楽・能。そのほかには近代詩歌・「おくのほそ道」・「伊勢物語」・「方丈記」・「風姿花伝」・「竹取物語」・「源氏物語」・「古事記」・「日本書紀」などが並ぶ。近代以降の散文というと、宮沢賢治・森鷗外・夏目漱石・芥川龍之介・泉鏡花などの名が挙がるが、さすがに言文一致以降の作家はあまり取り上げていない。漱石の文体は子規の写生文の流れを汲んでおり、言文一致の本流とは離れたところに位置していたし、鷗外も言文一致には否定的な考えを持っていた。宮沢賢治にしても、その特異な文体、擬音語の描写や、身体論の方面からも注目の集まる作者である、選定にそう間違いはないだろう。さすがに「声に出して読みたい」と標榜するからには、黙読形式に移行する前のテキストを選んでいる(著者に言文一致を意識したような発言はないが)。テキストの選定はひとまず良いようであるが、何より気になるのは、その、美談として本文にも取り上げられるような一説や、筆者の語りのほうである。

(幼い時期からの漢詩・和歌の朗誦は拷問かという自問に対して)
こうした疑問に対する一つの実践的な回答として、私は大阪のパドマ幼稚園の実践に出会った。そこでは、年少組みから漢詩を速いテンポで朗読・暗誦していた。その衝撃はけっしていやな感じのものではなく、むしろ子気味よいものであった。子供たちの表情は生き生きとしており、速いテンポでそうした調子のいい詩文を朗誦することを、体ごと楽しんでいるのがはっきりとわかった。)内 菅

原

世代や時代を超えた身体と身体との間の文化の伝承が、こうした暗誦・朗誦を通しておこなわれる。

世代を超えたテキストを持つことは、世代間の信頼関係を強める効果がある。自分が大切に思い暗誦しているものを、子どもや孫の世代が暗誦し体に内在化させているとすれば、そこに信頼感や安心感が生まれる。それが古典のよさである。

前田愛『近代読者の成立』において意識され、私が前田愛の意識として感じたのが、学校・寄宿舎・私塾・結社などの精神共同体内部での朗誦の習慣が、メンバーの連帯感を強化し、ナショナリズムの情念を励起する協力的な磁性を帯びていたということへの危惧である。しかし、近代読者とは、そうした等質性を抜け、個人的に多様な人生を、活字メディアを通して得ることができるようになったのである。明治初年の読者は、そうして体験する初めての「読書」に歓喜した。「身体文化」も「朗誦文化」も、結構な話であるが、明治初年、やっと到達した近代読者の多様性は失わずに置きたい。

注 1 見料をとって本を貸す業者。元来は、和本を入れた風呂敷包みを背負って市中を練り歩いていたが、新聞の「つづき物」に読者を奪われ(新聞の定価は、見料と同程度だった)、明治 15,6 年頃から凋落の一途をたどる。のち、店舗を構えた経営に移る。

注 2 江戸中期以降の通俗小説のこと。別注参考

注 3 『山川均自伝』157～158 頁 本書 168 頁

注 4 明治初年における日本人の識字率は男子 40%ないし 50%、女子 15%と推定されている(R・P・ドーア「徳川教育の遺産」『日本における近代化の問題』所収)が、平がなはともかくも、布令・布達などの漢語になると、数字はもう少し落ちるだろう。

注 5 小説家・詩人。東京生まれ。1885 年(明治 18)尾崎紅葉らと硯友社を興す。言文一致体の先駆者。代表作に『武蔵野』など。(1868～1910)

注 6 小説家。1887 年(明治 20)「浮雲」を書き、言文一致体の文章と優れた心理描写とで新生面を開いた。ロシア文学の翻訳にも優れ、「あひびき」などの名訳がある。ほかに「其面影」「平凡」など。(1864～1909)

注 7 『日本近代文学の起源』(講談社文芸文庫)所収

注 8 「予の愛読書」(本書 205 頁)

注 9 本書 205 頁

注 10 「予の愛読書」